

# リトルシニア関西連盟 大会規程

日本リトルシニア中学硬式野球協会関西連盟の主催する大会すべての運営が、円滑に運ばれることを目的として、ここに関西連盟大会規程（運営要項、野球特別規則）を定める。各チームの指導者は、大会参加にあたり、本細則を熟読し、大会の運営に協力すること。

（付記）本規程の構成および項目番号は、日本協会が定める『大会規程細則』に準じている。関西連盟独自の内容は、この下線を付して示す。

## = 運営要項 =

[チーム編成、変更、用具等]

- （１） 本連盟の主催する野球大会に出場する各チームは、必ず20歳以上の責任者が引率し、大会中選手のすべての行動ならびに応援等に対し責任をもち、チームを管理しなければならない。監督は20歳以上、コーチは18歳以上とする。監督とコーチは練習・試合における責任者であり、チーム運営においては会長、副会長、事務局長に従わなければならない。
- （２） 選手数が不足している（9人以下）2チーム以上の「合併チーム」あるいは近隣チームから選手を借り入れての「他チーム選手応援チーム」が、本連盟の主催する野球大会に参加することを認める。詳細は日本協会の『選手不足による大会参加の特別措置について』を参照のこと。
- （３） 複数チームの大会参加を認める。詳細は日本協会の『複数チームの大会参加規程』を参照のこと。
- （４） 大会ごとに所定の選手登録を行う。

選手の登録変更は、所定の用紙に変更理由を記載し、大会ごとの所定の期限までに大会本部に提出すれば認める。それ以降の変更は認めない。登録変更の内容は、けが等による選手変更（入れ替え）は認めるが、新規に選手を増やすことは認めない。登録証（カード）は試合会場に持参しなくてよい。
- （５） 大会中、不慮の負傷・疾病に対して、主催者（各球場大会本部）は応急手当を施すが、それ以上の責任は負わない。
- （６） ユニフォーム等の着衣や用具の使用については、日本協会の『リトルシニア野球用具の使用規程』に従う。
- （6-2） 前項の日本協会・用具使用規程に、次の内容を追加して適用する。
  - ① 捕手用具は、各チーム2セット以上を持参する。
  - ② 捕手の膝裏負荷軽減用クッション（ニーリリーフ）の使用を認める。
  - ③ 滑り止めスプレーの使用は禁止する。
  - ④ 投手は異物の装着はできないが、負傷等の応急処置として、目立たないもので投球に影響を及ぼさないと審判員が認めた場合は除く（審判員に申し出て許可を得ること）。
- （7） 欠番

#### [試合前の手続き]

- (8) 選手、監督・コーチは、必ず所定のワッペンを左の肩口に付けた同一のユニフォーム（帽子、アンダーシャツ、靴下、ストッキング、靴を含む）を着用する。背番号は、選手は1～25、監督は30、コーチは40・50・60・70を付けること。
- なお、スコアラーはスコアラーの仕事のみ行うものとし、ベンチに入らない登録コーチや、登録に関わらず選手のスコアラーを認める。選手以外のスコアラーは、ユニフォームではなくスポーティーな服装でベンチに入ること。
- (9) ベンチ内には、登録選手25名以内と登録した監督、コーチ（登録4名のうち2名以内）、スコアラー1名の他は入れない。
- (10) 監督が不在のときは、登録コーチの1名が監督代行として指揮を執る（公認野球規則4.02）。その旨を当日、メンバー表の監督欄に氏名・背番号を記入するとともに、球場本部に口頭で伝える。なお、スコアラーの代行も、同様に伝えるものとする。
- (10-2) 成人のベンチ入りが監督（または代行）1名のみの場合で、何らかの事情（体調不良、退場等）で試合から離れることになったときは、試合が継続できるよう、そのチームの関係者（成人）が1名ベンチ入りすることを特例として認める。
- (11) 各試合は、天候ならびに球場の都合によって、試合開始予定時刻を変更することがある。
- (12) 第1試合のチームは開始予定時刻50分前まで／第2試合以降のチームは前試合の3回終了までに、球場本部へ登録書、投球数確認シート様式A（原本とコピー2部）、メンバー表5部を提出して、大会役員による確認を受ける。試合前のメンバーの点呼は行わない。ただし違反が見つかった場合、監督のベンチ入りを禁止するなどの処分を下すことがある。なお、試合球の供出が必要な大会では、指定の新球（個包装のまま）を3個提出する。
- (12-2) メンバー表には、選手はベンチ入り全員をフルネームで記入し、ふりがなをつける。
- (13) 試合開始予定時刻に不在のチームは、不戦敗となることがある。また、選手が9名揃わないチームは、原則として棄権とみなす。
- (14) 監督および選手1名（原則として主将）は、第1試合のチームは試合開始時刻40分前／第2試合以降のチームは前試合の4回終了後（コールドゲームのときは試合終了次第）に、審判員または大会役員立ち会いのもとで、攻守の決定ならびにメンバー表の交換を行う。攻守の決定は選手によるじゃんけんで行う。
- (14-2) 試合に関して許可や承認を求める事項のあるチームは、メンバー表の交換の際に申し出る。
- (15) ベンチサイドは、大会組み合わせ番号の若い方を1塁側とする。
- (15-2) 試合開始に先立ち、審判員または大会役員は、ヘルメット、バット、捕手用具、グラブを点検し、安全性を確認する。

#### [試合後の手続き]

- (16) 試合終了後に、監督は投球数確認シート様式A（原本）を引き取ること。

#### [試合前の練習、グラウンド整備]

- (17) ノック時間は7分以内とするが、大会運営の都合により時間を短縮したり、ノック無しで試合を開始することもある。ノック時のボールパーソンは、危険防止のためヘルメットを着用する。シートノックができない場合、サイドノックを認めることもある。サイドノックの範囲・方法は、大会役員（球場責任者）が指示する。なお、シートノックを行う場合のサイドノックは禁止する。

- (17-2) 相手チームのシートノック中は、ベンチ内で待機すること。ただし、バッテリー1組に限りブルペンでの投球練習を認める（ヘルメットとグラブを着用したガードパーソンを伴う）。
- (18) ノック後試合開始前および試合終了後のグラウンド整備は、原則として両チームのベンチ入り選手により迅速に行う。なお、4回終了時のグラウンド整備は原則として行わない。

#### [試合中の配慮事項]

- (19) 攻撃側チームは、イニングの先頭打者とベースコーチは、ミーティングに参加せず所定の位置につく。
- (20) 次試合のチームは、バッテリー1組に限り、前試合の5回終了時からブルペンに入って投球練習を行うことができる（競技場内のブルペンは、ヘルメットとグラブを着用したガードパーソンを伴う）。ただし、ブルペンが片側1レーンしかない競技場での取り扱いは、大会役員（球場責任者）が指示する。
- (21) 試合進行を速めるよう配慮し、攻守交代は全速力で行う。ボールまわしは内野手1回までとし、投手への返球は原則としてその守備位置から行う。なお、試合の進行上または天候状況によっては、審判員の判断で変更する場合がある。
- (22) 捕手は、投手に返球したり野手に声を掛けるために、1球毎にホームプレートの前に出ないこと。
- (23) ボールパーソン（バットパーソンを含む）は、各チームとも原則としてベンチ横に2名用意する。背番号のない選手でも良いが、ベンチ入り登録選手と区別のつく上衣を着用する。
- (23-2) 打者のバットの引き下げは、危険防止のため、ヘルメットを着用しているボールパーソンまたは次打者のいずれかとする。ベンチ内の者が本塁付近へ出てこないこと。

#### [コート類の着用制限、身なり]

- (24) 競技場内に入る選手、監督・コーチは、コート類の着用を禁止する。プレイ中の選手はもちろん、ブルペンで練習中の選手も含む。また、選手は、ユニフォームの下に着込んでもいけない。  
ただし、ベンチ内および走者となった投手とベースコーチは除くほか、特に寒い日や雨天等の場合は、審判員の判断により許可する。（公認野球規則3.03(c)[注]）
- (25) 選手、監督・コーチおよびスコアラーは、不快感を与えるような長髪、ひげ、茶髪は極力控え、清楚な格好で大会に臨むこと。なお、ピアスは禁止する。

#### [ベンチ内留意事項]

- (26) ベンチ内で携帯マイクの使用は禁止する。監督に限りメガホンの使用を認める。
- (27) 相手チームや、相手方選手、審判員に対する野次等は、ベンチ内選手はもとより応援者もこれを禁止する。なお、ベンチおよび応援者のマナーについては、大会役員または審判員が監督経由で注意する。
- (28) ベンチ内に携帯電話、タブレット端末やパソコン等の電子機器を持ち込み、外部と情報交換することを禁止する。

## = 監督、指導者に対する注意事項 =

- (1) 監督会議や抽選会、メンバー表交換時に説明または定められた事項は、チーム全員に徹底させること。
- (2) 監督・コーチは、出場選手に対し、中学生らしい態度で試合を行うように指導すること。
- (3) 試合中、監督・コーチおよびスコアラーは、特別の理由の無い限り、みだりにベンチを離れないこと。
- (4) 試合中および練習中に、指導者が選手に対し、暴力や体罰等の行き過ぎた指導があれば、日本協会規程第9条ならびに関西連盟規約細則第4章に則り、連盟より厳しい処置を科す。

- (5) いかなる理由があっても、監督は判定を不服として試合中に選手を競技場よりベンチに引き上げさせてはならない。公認野球規則7.03を適用する場合もある。
- (6) 監督は、自チームの応援団の行為について責任を持つこと。
- (7) 応援団の用具はメガホンのみ認めるが、メガホンどうしをたたくことや、鐘、太鼓、笛、ペットボトル等の鳴り物は禁止する。また、投手が投球動作を起こすと同時に歓声をあげることがあるが、その度合いが過ぎると判断したときは、審判員または大会役員が監督経由で注意を与える。
- (8) 監督・コーチ、スコアラーおよび選手は、スタンドの応援団とみだりに私語を交わしてはならない。

## ＝ 選手に対する注意事項 ＝

- (1) 選手は、常にスポーツマンらしいきびきびとした動作でプレイすること。
- (2) 試合開始および終了時の挨拶において、両チームの選手間で奇声を発しないこと。また、本部および相手方ベンチ前に行って挨拶しないこと。
- (3) 3アウト後、試合球は投手板付近に置くこと。雨天時は審判員に渡すこと。
- (4) 球審からボールを受け取る投手、予備ボールを手渡す選手および打席に入る打者は、その都度球審に礼をしなくてもよい。
- (5) 試合開始時と終了時に両チームは、本塁をはさんで整列し、審判員の指示で礼を交わすこと。

## ＝ 野球特別規則 ＝

### [競技場特別ルール]

- (1) 競技場に特別ルールがあるときは、審判員は、各試合前に監督立ち会いのもとにこれを告知し競技にあたらなくてはならない。なお、ブルペン設置のない競技場では、大会役員（球場責任者）は、競技場内にブルペン領域の設定ができる。
- (2) 球場の使用時間制限等がある場合、その当日の最終試合は、制限時間まで1時間45分あれば試合を行う場合もある。

### [試合の成立]

- (3) 試合は7イニング制とし、5回終了をもって正式試合とする。4回終了時10点差以上または5回終了時以降7点差以上の場合、正式試合としコールドゲームとする。ただし、決勝戦は得点差コールドゲームを適用しない。
- (3-2) 正式試合が成立した後に荒天等で試合続行不可能になった場合の勝敗判定は、公認野球規則7.01(g)(4)[注]による。

### [時間制限と試合成立の関係]

- (4) 試合は2時間制限試合とし、5回以降試合開始から2時間00分を超えては新しいイニングに入らず、制限時間に達した時点でのイニング（表裏）を最終回とする。そのイニング終了時点で同点の場合は、それ以降タイブレーク方式を採用する。ただし、決勝戦は2時間制限試合を適用しない。
- ① 4回以前に2時間に達した場合でも、5回までは継続して行う。

- ② 5回以降、後攻チームがリードしている状態で、後攻チームの攻撃中に2時間に達した場合は、その時点で試合を打ち切り、後攻チームの勝利とする。
- ③ 5回以降、後攻チームがリードしている状態で、先攻チームの攻撃中に2時間に達し、後攻チームがリードしたまま先攻チームの攻撃が終了した場合は、その時点で試合を打ち切り、後攻チームの勝利とする。
- ④ 5回以降、後攻チームがリードしていない状態で2時間に達し、その回の後攻チームの攻撃で勝ち越し点が入った場合は、その時点で試合を打ち切り、後攻チームのサヨナラ勝ちとする。

[中 断]

(5) 2時間の制限時間において、次の場合による中断は試合時間に算入しない。

- ① けが等により、選手・審判員の治療や交代に要した時間
- ② 降雨、強風、雷等の荒天による中断時間
- ③ 夏季の飲水タイム
- ④ 審判員の協議およびその説明に要した時間
- ⑤ その他不測の事態により、審判員が必要と認めたもの

(5-2) 前項による中断の再開後、審判員または大会役員は、すみやかにロスタイムまたは残り時間を両チームに通知する。

[タイブレーク、決勝戦同点の場合の決定法]

(6) 7回終了時同点の場合、2時間以内であっても通常の延長戦は行わず、タイブレーク方式に入る。また、5回・6回で時間切れて同点の場合も、タイブレーク方式に入る。

タイブレーク方式は、1アウト満塁からとし、打者は継続打順とする。走者は、打者の前の打順の者が1塁走者、その前の者が2塁走者、さらにその前の者が3塁走者とする。これらの打者・走者への代打・代走は、通常の交代として認められる。

タイブレーク方式は、時間に関係なく最長3イニングまでとし、未決着の場合は抽選とする。また、タイブレーク中に荒天等で試合続行不可能になった場合は、抽選とする。

抽選は、球審が○×9個ずつのくじを持ち、両チームの最終出場者9人ずつがくじを引き、○の多かったチームを勝ちとする。

(7) 決勝戦は、7回終了時同点の場合、通常の延長戦に入り、最長2イニング行う。延長9回終了時なお同点の場合は、10回からタイブレーク方式に入り、勝敗が決着するまで行う。

(7-2) 本連盟のブロック予選の決勝戦は、順位決定戦の1つとみなし、得点差コールドゲームや2時間制限試合を採用する。

[特別継続試合]

(8) 荒天、日没その他の理由により試合続行が不可能となった場合で、(3)項で定める正式試合が成立していないときは、後日、この試合の回と経過時間を引き継ぎ、特別継続試合を行う。特別継続試合の日程等は大会本部で決定するが、原則として翌開催日の第1試合に組み入れる。なお、登録されている監督・コーチ、スコアラーであれば、変更(入れ替え)も可とする。

(8-2) (3)項で定める正式試合成立後であっても、(3-2)項による勝敗判定が引き分けて、かつ、タイブレーク方式に入っていないければ(すなわち前の回の終了時点で制限時間が残っていた場合)、本連盟では抽選とはせず、特別継続試合を適用する。

(8-3) 特別継続試合は、中断となったそのままの状態<sup>で</sup>継続(再開)するため、大会役員、審判員、両チームの監督・スコアラーは、中断時点での試合の状態を確認・記録し、メンバー表とともに保存・引き継ぎの処置を行うこと。

なお、特別継続試合における投球数制限は、前の試合での残り投球可能数は引き継がれず、その再開日に新たに行われる試合として取り扱われる。

#### [危険防止措置]

(9) 打者、走者、ベースコーチ、ボールパーソンは、危険防止のため両耳付きヘルメットを着用する。また、捕手は、ファウルカップおよび捕手用具を着用のこと(投球練習時およびブルペンにおいても同様とする)。

(10) 競技場内のブルペンの使用中は、打球防護のため、ヘルメットとグラブを着用したガードパーソンを付ける。

(10-2) 競技場内のブルペンの使用は、試合前ノック開始から試合終了までの間、1チーム1組に限る。

(11) 次打者もしくはその代打予定者は、次打者席内で待ち、投手が投球動作に入ったら自身の安全のため素振りをやめ、投球・打球をしっかりと見守る。また、守備を妨害するような行為をとってはならない。

(11-2) 試合中、投球・打球・送球が選手の頭部や顔面等に直撃して倒れこみ、人命に関わるような事故が起きた場合は、人命尊重を第一に審判員は即刻タイムを宣告してプレイを止め、適切な措置をとる。なお、試合再開時の状況設定については、審判員の判断で決定する。

(12) (平素の練習時の注意事項) けが防止の対策として、フリー打撃、ティー打撃、ロングティーなどの打撃練習中の投手やティーを上げる者のヘルメット着用や防球ネットの配置などには、十分に配慮する。

#### [投手]

(13) 投手は、投手板に触れて捕手からのサインを受けなければならない。セットポジションの姿勢でサインを見る場合は、片方の手を下におろして身体の横につけていなければならない。

投球姿勢におけるwindアップポジションおよびセットポジションの足の位置について、2022年度に公認野球規則が改正されたが、本協会ではいままでどおりとする。

(※“いままでどおり”とは、サインを見るときに自由な足の置き方で「投手板よりも本塁側へ置けばセットポジション」「そうでなければwindアップポジション」と区別をつけるものである。)

なお、セットポジションをとる際の両手の静止位置は、同一投手は1試合を通じて同じ位置で止めなければならない。

(14) 投手は、捕手・野手からボールを受けたあと、走者がいない場合には12秒以内、走者がいる場合には20秒以内に投球しなければならない。

違反した場合、球審は、走者が塁にいない場合にはただちにボールを宣告する。走者がいる場合は警告を発することとし、同一の投手が2度繰り返したら、3度目からはその都度ボールを宣告する。塁に牽制球を送球したときは、20秒の計時をリセットする。

なお、適用の詳細については、社会人野球および大学野球の『投手の12秒及び20秒ルールの適用に関するガイドライン(2015年1月)』による。

(15) 投手の肘・肩の障害を予防するため、投球に関しては、日本協会が定める『リトルシニアの投球数制限に関する統一ガイドライン』に従う。他団体との交流戦で必要あるときは、日本中学硬式野球協議会が定める『中学生投手の投球制限に関する統一ガイドライン』に従う。

[打者]

- (16) 打者は、みだりにバッタボックスを出ることは許されない。たとえタイムを要求しても、審判員がタイムを宣告しない時はインプレイである。(アマチュア野球内規②)

[臨時代走]

- (17) 試合中、選手に不慮の事故が起き、攻撃側監督より臨時代走の申し出があった時、審判員がその必要を認めれば、守備側監督に事情を説明して許可する。なお、頭部への死球は自動的に臨時代走とする。臨時の代走者は、事故のあった選手より打順が1つ前位の者(ただし投手は除く)とし、得点するか残塁となるまで任務を継続し、その場限りとする。守備側チームに指名権・拒否権はない。また、臨時代走に対して通常の代走を起用することは可能である(事故のあった元の選手に対する交代となる)。  
なお、臨時代走適用対象外の選手の事故の場合や、臨時代走適用後の試合復帰については、交代かプレイ続行かの判断を監督に委ねる。

[ラフプレイ]

- (18) 選手の安全を守るため、故意に相手方選手を傷つけるような行為があった場合は、当該審判員の判断により、その選手を退場させることがある。

[ハーフスイング]

- (19) ハーフスイングの裁定については、公認野球規則8.02(c)[原注2]を適用する。

[監督の抗議および通告]

- (20) 抗議および選手交代の通告は、必ず監督(不在の場合は、運営要項(10)に定めた監督代行)が行う。抗議は、監督1名が当該の審判員に対して行うこと。  
(21) ストライク・ボール、アウト・セーフおよびフェア・ファウルボールの裁定に限らず、審判員の判断に基づく裁定は最終のものであるから、監督・コーチ、選手および控えの選手がその裁定に対して異議を唱えることは許されない(公認野球規則8.02(a))。  
(21-2) 試合中降雨等で続行するか中止するかは、審判員と大会役員(球場責任者)で判断決定するものであり、当該チームが意見を申し出ることができない。日没の場合でも同様である。  
(22) 審判員の裁定が規則の適用を誤って下された可能性のあるときには、監督が当該審判員に規則適用の訂正を申し出ることができる(公認野球規則8.02(b))。

[審判員の裁定]

- (23) 控え審判員を含む審判員の合議の裁定は、最終判定となる(公認野球規則8.02(c))。  
(23-2) 中断時間が10分を超える場合は、試合続行を優先する。納得できないときは、当該チームから本連盟(大会本部)に申出書を提出することとする。  
(24) 審判員は、規則に明確に規定されていない事項に関しては、自己の裁量に基づいて、裁定を下す権能が与えられている(公認野球規則8.01(c))。

[監督の指示および野手が投手のもとに集まれる回数制限]

- (25) 監督が投手のもとへ行くことができる回数を、1試合(7イニング)に2回までとする。ただし、投手を交代させた場合は回数として数えない。時間は、審判員がタイムを宣告後30秒以内とする。  
(26) 監督が、1イニングに同一投手のもとへ2回行った場合(公認野球規則5.10(l)を適用)および、1試合に2回投手のもとへ行った後3回目に行けば、その時の投手は自動的に交代する。ただし、その投手は他のポジションにつくことができる(公認野球規則5.10(d)[原注]の第1段は適用しない)。

タイムブレークまたは延長回に入った場合、監督は、それ以前の回数に関係なく2イニングに1回、投手のもとへ行くことができる。

- (27) 2人以上の野手（捕手を含む）が投手のもとへ行く（集まる）ことができる回数を、1試合（7イニング）に3回までとする。投手交代の際、監督と共に野手がマウンドに集まることは、野手の回数として数えない。

タイムブレークまたは延長回に入った場合、野手は、それ以前の回数に関係なく1イニングに1回、投手のもとへ行くことができる。

- (27-2) 投手交代ではない際も、監督と共に野手が投手のもとへ集まることは、野手の回数として数えない。ただし、野手が集まってから監督がベンチを出発した場合や、監督がベンチへ戻るためファウルラインを越えてもなお野手が集まっている場合は、監督と野手双方の回数として数える。

- (28) 攻撃側の監督が打者または走者に指示を与えることができる回数を、1試合（7イニング）に3回までとする。時間は、審判員がタイムを宣告後30秒以内とする。

タイムブレークまたは延長回に入った場合、攻撃側の監督は、それ以前の回数に関係なく2イニングに1回、打者または走者に指示を与えることができる。

- (29) 攻撃側の監督は、相手チームのタイム中に打者・走者に指示を与えることができるが、プレイの再開を遅らせた場合は攻撃側監督のタイム1回と数える。（守備側の監督は、たとえ相手チームのタイム中でも、投手のもとへ行けば守備側監督のタイム1回と数える。）

注1. 監督が投手のもとへ行ったかどうかの判断は、ファウルラインを越えたか否かを基準とする。

注2. 野手が投手のもとへ行ったかどうかの判断は、各塁を結ぶ線と投手板の中間点を越えたか否かを基準とする。

#### [マナーアップ、スピードアップ]

- (30) マナーアップ、スピードアップについて

① 試合中のマナーアップを図るため、以下の点を順守すること。

ア. 塁上の走者やベースコーチ等が守備側のサインを盗み打者等に知らせることは禁止する。紛らわしい行為が現行で認められた場合、処分が下される場合がある。

イ. 得点した時、選手のリーダーが音頭を取り、声を揃えて手拍子する行為は自粛する。

ウ. 本塁打を打った選手をベンチから出での出迎えは禁止する。

エ. 捕手が投球を受ける際、ストライクに見せる意図でミットを動かすことを禁止する。

オ. 捕手が投球を受ける際、極端にキャッチャースボックスから出て構えることを慎む。

カ. 勝敗が決定したとき等に、必要以上に大騒ぎをすることを慎む。

キ. 投手が準備投球中、投球動作に合わせてバットスイングをしてはならない。次打者（回の先頭打者を含む）は次打者席で待つこと。

ク. グラウンド整備中、キャッチボールおよびバットスイングは禁止する。

ケ. 塁でプレイが行われようとしているとき、走者やベースコーチがセーフのジェスチャーをする行為を禁止する。

コ. 相手チームのエラーやボーク等を誘発するような言動は禁止する。例えば、内野での守備が行われているとき「あるよ、あるよ」など相手野手のエラーを誘うような声や、「ボーク、ボーク」などと相手投手の投球動作や投球に支障をきたすような声を発してはならない。



② 試合中のスピードアップを図るため、以下の点を順守すること。

監督の行動

- ア. 監督のマウンドへの行き帰りは、小走りでスピーディーな行動をとる。
- イ. 複雑なサインによる時間のロスをなくし、すみやかにサインを出す。
- ウ. 選手交代時はできるだけ交代選手を事前に準備させ、明確にかつ簡潔に球審に告げる。
- エ. 攻守交替（攻撃）の時、ベンチ前ミーティングは短くし、すみやかに選手をベンチに入れる。

選手の行動

- ア. バッテリーのサイン交換はすみやかに行う。
- イ. 投球のインターバルは長くせず、テンポ良く投球しスピードアップを心がける。
- ウ. 捕手の防具装着は控え選手が手伝いすみやかに守備につく。
- エ. 投球がワンバウンドした時、不必要に毎回球審にボール交換を要求しない。
- オ. スパイクシューズのひもの結び直してタイムを取らないように事前に確認する。
- カ. タイムでマウンドに集まった後、駆け足で守備位置に戻る。
- キ. 準備投球は、球審とバッテリーが準備投球数を確認し投げさせることとする。ただし上限の目安としては1分間・8球とする。急遽登板しなくてはならなくなった投手には、状況に応じて臨機応変に対応する（公認野球規則5.07(b)）。
- ク. ベンチ前でのキャッチボールおよびバットスイング、ランニングは禁止する。

＝ 附 則 ＝

(1) ブロック大会および各チームのエキシビジョンゲーム等も、本大会規程に基づいて行うこと。

(2) 制定、改正の履歴

1984年 9月	制定	2004年 9月	一部改正
1987年 1月	一部改正	2005年 9月	一部改正
1988年10月	一部改正	2006年 9月	一部改正
1990年10月	一部改正	2007年 9月	一部改正
1991年11月	一部改正	2010年11月	全部改正
1992年 9月	一部改正	2012年12月	一部改正
1994年 9月	一部改正	2014年12月	一部改正
1997年 1月	一部改正	2017年 8月	一部改正
1999年 1月	一部改正	2018年 5月	一部改正
2001年 1月	一部改正	2020年 1月	一部改正
2002年 1月	一部改正	2023年 4月	全部改正
2003年 1月	一部改正	2024年 2月	一部改正

◇ 2024年2月の改正点

日本協会『大会規程細則』の2023年11月改正を反映した。

- ・ 試合時の登録証（カード）持参の不要化
- ・ 試合前のメンバー点呼の廃止
- ・ 打撃練習時の注意の項目を挿入
- ・ セットポジションの静止位置について追加
- ・ 項番の変更

※同時に、日本協会『野球用具の使用規程』では手袋等一部の用具の色制限が撤廃されている。